

産業組織論 第04回

社会的余剰

先週の補足

$$y_i = \begin{cases} +\infty & \text{if } p > c_i \\ [0, +\infty) & \text{if } p = c_i \\ 0 & \text{if } p < c_i \end{cases} \quad \text{について}$$

- 「if」ってのは数式の中だから、英語で書きたかっただけ。
- $p > c_i$ のときは作れば作るほど稼げる。例えば、100円で作ったものが1000円で売れば1単位作る毎に900円利潤が増加する。このとき、利潤を最大化する生産量は存在しないので、 $+\infty$ と書いている。

先週の補足

- $p = c_i$ のときは何単位生産しようと利潤ゼロ（例えば、100円で作って100円で売る）。よって、全ての生産量で利潤最大化していることになる。
 $[0, +\infty)$ はゼロ以上の実数全体を表す。
- $()$ と $[]$ の違い
 - $(1, 2)$: 1より大、2未満
 - $[1, 2]$: 1以上、2以下
 - $[0, +\infty]$ と書いてしまうと $+\infty$ を含んでしまうので（通常の意味では）ダメ（ ∞ は「数」ではないから）

先週の補足

- $p < c_i$ のときは作るほど赤字になる。例えば、100円で作って50円で売れば1単位だけ売ったときの利潤はマイナス50円。このような場合生産しない方がよいから、生産量ゼロが利潤最大化の解。

今日やること

- 消費者余剰
- 生産者余剰
- 社会的余剰
- 効率性と公平性

消費者余剰

- 留保価格（支払許容額）：消費者が財1単位を消費しようとするとき、支払って1単位消費することと消費しないことがちょうど無差別となる価格。

（留保価格）－（実際に支払った価格）

＝財の取引による消費者の便益（得した分）

（＝財の消費による効用の増加）

これを合計（全消費者の全消費分）したものが
消費者余剰

消費者余剰

- つまり、消費者余剰とは財の取引による全消費者の効用の増加を金銭で評価したものの。
- 留保価格は需要曲線を逆向きに見ることで得られる。需要曲線と縦軸・支払価格で囲まれる三角形の面積が消費者余剰。

生産者余剰

- ある生産者が財を生産・販売するとき、販売量と供給曲線・横軸で囲まれる部分（供給曲線の下側の三角形or台形状の部分）の面積は可変費用に等しい（右上がりの供給曲線を想定）。
- このときの収入は受取価格 × 販売量の長方形。
- よって、受取価格と縦軸・供給曲線で囲まれる三角形形状の面積は収入－可変費用。

生産者余剰

- すべての生産者について、利潤＋固定費用（＝収入－可変費用）を合計したものを生産者余剰という。
- つまり、生産者余剰は産業全体の利潤（＋固定費用）に相当する。取引によって、生産者の得した分が生産者余剰。

社会的余剰

- 全ての経済主体の便益を合計したものが社会的余剰(総余剰)。
- 市場均衡では縦軸と需要曲線・供給曲線に囲まれる三角形の部分の面積が社会的余剰。
- 政府を考える場合にはネットの税収も含む(誰かがそのまま受け取ることを想定)。

効率性と公平性

- 社会厚生(厚生, 経済厚生): 社会全体の効用のようなもの。
- 政府(政策当局)の目的: 社会厚生を最大化。
- 社会厚生は分析によって異なる。この講義では社会厚生 = 社会的余剰とする。
- 厚生経済学の第1定理: 完全競争市場において、市場均衡は効率的。

効率性と公平性

- 注意：社会的余剰の大きさと誰が便益を享受しているかとは関係ない。
- 効率的：社会的余剰が最大となる状態。
- 衡平（こうへい）：経済主体間で保有する財の組を入れ替えても効用が増加しない状態。羨望のない状態。
- 公平＝効率的 & 衡平
- 「社会厚生＝社会的余剰」とすることは効率性のみ考慮すること。よって、これはベンチマーク。